湘南医療大学

ティーチング・ポートフォリオ

― 2026 年度版 ―

大学名	湘南医療大学
所　　属	保健医療学部　リハビリテーション学科 理学療法学専攻
名　　前	森尾　裕志
作 成 日	2026 年 5 月 1 日

1. 教育の責任

私は，湘南医療大学保健医療学部リハビリテーション学科理学療法学専攻（看護学科 140 名，理学療法学専攻 60 名，作業療法学専攻 40 名）において，主として理学療法学専攻学生の専門教育科目を担当している。本学を卒業する学生のほとんどは，国家資格である理学療法士として病院・施設等で障害を持つ方々のリハビリテーションに従事する。彼らが対象とする患者は同一の障害像ではないため，学校で習得した知識・技術を個々の対象者に応じて応用できる力，および対象者に分かりやすく伝える力を身につけさせることが私の責務である。

2026 年度は，学部において「運動生理学」（科目責任者，1 単位），「呼吸・循環系理学療法学」（科目責任者，1 単位），「呼吸・循環系理学療法学演習」（科目責任者，1 単位），「老年期理学療法学」（科目責任者，1 単位），「理学療法特論 I」（科目責任者，1 単位），「理学療法教養基礎」（2 単位），「クリニカルリーズニング論」（1 単位），「理学療法特論 II」（1 単位），「理学療法卒業研究」を担当している。大学院では「呼吸循環機能学特論」「呼吸循環機能学演習」「心身機能回復特別研究」（修士課程，科目責任者）に加え，2024 年度より湘南医療大学大学院 保健医療学研究科 博士後期課程の科目「身体機能支援医療学特論」「身体機能支援医療学演習」「リハビリテーション学特別研究」（博士後期課程）を担当している。

また，2026 年度は理学療法学専攻 2 年生の副チューター長を務めるとともに，臨床実習指導や修士論文・博士論文の研究指導，学内の FD 委員会業務など，教育・運営両面で責任を負っている。

2. 私の理念・目的

2-1. 私の理念

私は 2015 年度に湘南医療大学に着任して以来，以下の三点を重点に置いた教育理念を掲げてきた。

第一に，「臨床」「研究」「教育」の三要素を一体として身につけた人材を育てることである。患者に対する理学療法に絶対の正解はないが，臨床経験と科学的根拠を組み合わせることで，より最適な介入を選び出すことはできる。学生には，自らの行動を考え抜く力と，考えを行動に移す行動力の双方を備えてもらいたい。

第二に，関連病院・施設との臨床研究を通じて，臨床に強く根ざした理学療法士を養成することである。本学が属するふれあいグループには 50 を超える関連施設があり，他に類のない臨床研究の土壌を持つ。学生のうちから臨床と研究の往復を経験させ，「臨床に活きる研究」「研究に活きる臨床」を実感してもらうことを目指している。

第三に，卒前からの多職種連携教育（Inter Professional Education；IPE）の充実である。本学は看護学科・理学療法学専攻・作業療法学専攻・薬学部を擁し，4 職種で構成可能な数少ない大学である。学生には，他職種の役割と専門性を在学中に体感させ，チーム医療の中で力を発揮できる人材へと成長させたい。

2-2. 理念をもつに至った背景

私は前職（聖マリアンナ医科大学病院リハビリテーション部，1997 年〜2015 年）の臨床現場において，「臨床」「研究」「教育」の三要素を一体として捉えるよう先輩方から徹底して教えられた。臨床で生じた疑問点を研究の問いに昇華させ，得られた知見を臨床現場に還元し，さらに後進に伝えていく――このサイクルを繰り返す中で，新しい治療や評価法を患者に届けることができ，何度も「理学療法士になって良かった」と感謝の言葉をいただく経験をした。この体験は私の教育観の原点となっている。

また，科学研究費（基盤 C）や日本理学療法士協会研究助成，笹川保健財団研究助成，NSK メカトロニクス技術高度化財団研究助成などを獲得しながら研究を継続するなかで，臨床の問いを科学的に検証することの面白さと意義を改めて実感してきた。学生たちにも，国家試験合格を最終目標とするのではなく，生涯にわたって「臨床から問いを起こし，研究で確かめ，教育で伝える」自律的な医療人となってほしい。これが私の教育理念を形づくった背景である。

さらに，東日本大震災（2011 年）の医療救護班としての経験，HTLV-1 関連脊髄症（HAM）診療ガイドライン作成への参画，地域住民を対象とした健康教室や福祉用具コンテストなどの社会活動を通じて，「医療は病院の中だけで完結しない」という認識を深めてきた。学生には，地域に出て，在宅・福祉・産業の現場を肌で感じてもらいたいと考えている。

3. 教育の方法・戦略

上記の理念を実現するため，私は授業形態に応じて以下の方法・戦略を講じている。授業は大別して，①座学，②演習，③課外活動，の三層で設計している。

3-1. 座学授業

座学では，「自ら考えながら解く授業」を基本方針とし，受け身の聴講にならないよう以下の工夫を行っている。

- 毎回の授業で小テストを実施し，学習の落としどころを明確化する。2026 年度からは，国家試験形式の選択問題を取り入れ，知識の定着と国試対策を両立する。
- 小テストは，眠気の出やすい時間帯（授業中盤）に配置し，学生の集中を取り戻す機能も持たせる。
- 科目ごとにレジュメ表紙の色を変え，学生が複数科目の資料を取り違えないよう配慮する。
- 図表は作図したものを口頭で示し，配布資料には敢えて含めず，学生が必要な情報を教科書から取り出す訓練を組み込む。
- 臨床現場での実体験エピソードを随所に挟み，「今学んでいる知識がベッドサイドでどう活きるか」を具体的にイメージさせる。

3-2. 演習系授業

演習系科目（呼吸・循環系理学療法学演習，理学療法卒業研究など）では，アクティブラーニングと小グループ指導を軸としている。

- 学生には到達目標と課題のみを与え，到達経路は学生自身に考えさせる。野放しにはせず，要所で教員がフィードバックを返す。
- 心肺運動負荷試験，6 分間歩行テスト，30 秒椅子立ち上がりテストなど，臨床で頻用する評価を実機・実体験で経験させる。
- 卒業研究では，立案（クリニカルクエスチョン抽出，文献検索，研究デザイン），実施（倫理審査，データ収集），分析（統計解析），発表（学会発表，論文化）までの一連を経験させ，臨床研究を遂行できる素地を育てる。

3-3. 課外活動・大学院教育

- 20 代の若者は可能性の塊であり，物理的・精神的に行動範囲を広げてもらいたいと考え，私自身が参加する学会・研究会・勉強会に学生を積極的に同伴する。コロナ禍で一時中断したが，2023 年度以降，以前のスタイルに戻しつつある。
- 学生・院生との共同研究として「みせるコルセットの開発」がヨコハマ・ヒューマン&テクノランド福祉用具コンテストで JAL 賞を受賞（2019 年）するなど，課外での創造的活動を通じて学生の自信を育てている。

- 大学院では，これまでに修士課程 6 名を主査として輩出し，現在博士後期課程に 2 名が在籍している。論文指導においては，学生の主体性を尊重しつつ，国際誌・国内誌への投稿を支援している。

3-4. ICT と多職種連携の強化（2026 年度の新規取組）

- デジタル機器・遠隔医療ツールの活用方法を授業内外で指導し，学生の ICT リテラシー向上を図る。これは私の現在の研究テーマである「遠隔医療促進のための呼吸機能評価・トレーニングの開発」（笹川保健財団助成）とも連動する。
- 看護・作業療法・薬学の各専攻と協働した「チーム医療論」を活用し，事例検討を通じて IPE を深める。

4. 学習成果

本学で担当している全科目の学生授業評価（5 点満点）において，総合評価 4 点以上を維持してきた。直近の 2025 年度（令和 7 年度）は，主要担当科目で高い評価を得ている。

科目	総合評価（2025 年度）	教員の熱意
呼吸・循環系理学療法学	4.86 / 5.00	4.86 / 5.00
老年期理学療法学	4.68 / 5.00	4.68 / 5.00
運動生理学	4.80 / 5.00	4.80 / 5.00
理学療法特論 I	4.70 / 5.00	4.70 / 5.00

学生の自由記述には，「眠くならないよう間に小テストを挟んでいてありがたかった」「フィードバックが手厚く，自分の技術になっていく実感が得られた」「実習に行くための緊張感とモチベーションになった」など，授業設計の意図に呼応するコメントが寄せられている。学外への成果としては，①課外活動での JAL 賞受賞（2019 年），②NSK メカトロニクス技術高度化財団研究助成の獲得（2026 年），③HTLV-1 関連脊髄症（HAM）診療ガイドライン 2025 の作成協力（2025 年），④国際誌（Frontiers in Rehabilitation Sciences，Patient Preference and Adherence など）への論文掲載，が挙げられる。指導した大学院修了生から英語論文が産出されつつあることも，私の教育の手応えとなっている。

5. 改善のための努力

- 少人数制での丁寧な指導：時間外でも質問を受け付ける環境を整え，オフィスアワーを活用した個別指導を強化する。
- 予習機会の整備：正規授業の前週に教員とのアポイントによる予習時間を設け，授業内での理解度を底上げする。
- 科目間の評価基準の調整：授業評価で「先生によって評価基準が異なる」との意見があったため，専門性を保ちながらも，75 点を共通セットポイントとして定義し，教員ごとの標準偏差を算出して必要に応じ調整点を加える運用を提案・試行する。
- FD 研修への継続参加：教育成果を客観的に分析する手法と最新の教授法を学び続ける。

6. 今後の目標

6-1. 短期目標（2026 年度～2027 年度）

- PT2 年生の副チューター長として，休退学者ゼロを達成する（2027 年 3 月までに評価）。
- 国家試験形式の小テストを全担当科目に導入し，学生の国試合格率向上に直接寄与する仕組みを確立する。
- 博士課程院生 2 名の研究を支え，国際誌への筆頭論文掲載を 2027 年度までに達成する。

6-2. 長期目標（3～5 年スパン）

- ふれあいグループの関連病院・施設（湘南東部総合病院，大和成和病院，鶴見ホスピタル，シニアホテル東戸塚サウスウイング 等）と連携した多施設臨床研究の枠組みを構築し，学生・大学院生が日常的に臨床研究に触れられる仕組みを整える。
- 看護・作業療法・薬学と連携した IPE プログラムを「チーム医療論」を起点に拡充し，事例ベースの体系的なカリキュラムへと発展させる。
- 遠隔医療・デジタルヘルス技術（呼吸機能評価アプリ，発声ゲーミフィケーション，AR ステップトレーニング等）を授業教材に組み込み，新しい時代の理学療法教育を実践する。

7. エビデンス／参照元

1） 教員個人調書・履歴書・教育研究業績書（湘南医療大学，2026 年 4 月）

2） 保健医療学部リハビリテーション学科シラバス（2026 年度版，担当科目分）

3） 学生による授業評価アンケート結果（2015〜2025 年度，主要担当科目）

4） 2025 年度個人研究実績報告書（2026 年 3 月 17 日）

5） 2026 年度個人研究目標設定・計画書（2026 年 4 月 24 日）

6） 獲得した競争的研究資金通知（科研費基盤 C 18K10555，笹川保健財団 2024-03，NSK メカトロニクス技術高度化財団 財信 16021，笹川保健財団 2026-02）

7） 受賞記録：JAL 賞（第 18 回ヨコハマ・ヒューマン＆テクノランド福祉用具コンテスト，「みせるコルセットの開発」，2019 年）

8） 著書一覧（理学療法リスク管理マニュアル，循環器理学療法の理論と技術，HTLV-1 関連脊髄症（HAM）診療ガイドライン 2019・2025 ほか）

9） 学術論文一覧（査読付き原著 70 編，総説 23 編，学会発表 150 編 ほか）

10） 大学院生指導実績（修士課程 6 名修了，博士後期課程 2 名在籍中）

以　上